

中学校 1 学年数学，英語における効果的な T T・少人数指導の在り方

太良町立大浦中学校 教諭 武富 幸就
佐賀市立松梅中学校 教諭 南里 貴子

唐津市立鏡中学校 教諭 福山 賢二

1 研究の趣旨

佐賀県では中学校 1 学年のすべての学級において，数学・英語の少人数授業や T T による生徒一人一人に応じたきめ細かな指導が実施され 3 年になる。平成 18 年度佐賀県小・中学校学習状況調査によると約 90% の中学校で T T 授業を行っているが，その約 70% は T 1 が一斉授業をする中で，T 2 が個別指導で補佐する指導形態である。

同調査によると，数学・英語における T T や少人数指導では，90% 以上の教師が学習の習熟度が十分でない生徒への対応を重視している。その際の学習意識調査では，T T や少人数授業を「好き」，「どちらかといえば好き」と回答した生徒の割合は 80% 以上であり，生徒も T T・少人数授業を好意的にとらえている。しかしながら，同調査では，1 年生の数学と英語が「余り分からない」と回答した生徒の割合は約 25% だった。また，平成 18 年度の数学・英語の T T 授業に関する意識調査からは，「指導内容を理解できた子どもが増えた。」と 81% の教師が答えた。これに対して，「勉強が分かりやすくなった。」と 47% の生徒が答えた。さらに，「子どもたちが楽しく勉強するようになった。」と 58% の教師が答えたのに対して，「勉強が楽しくなった。」と 30% の生徒しか答えなかった。このように教師と生徒の意識のずれが約 30 ポイントもあり，その差を埋めるために T T の指導方法の改善が必要である。

また，平成 18 年度佐賀県小・中学校学習状況調査では「学習状況が十分な子どもを更に伸ばす手立てが必要である。」と考える教師が比較的多かった。このことから，すべての生徒に「勉強が楽しくなった。」と感じさせ，基礎学力を定着させていくためには，生徒一人一人の違いに応じたきめ細かな取り組みが欠かせない。そのために，様々な習熟の段階にある生徒同士が自分の考えを他者と交流させ，理解を深めさせる「学び合い」活動を取り入れる。「学び合い」活動では生徒一人一人への細かな配慮が必要となるので複数の教師による支援が重要であると考えた。

そこで，本グループでは，生徒が主体的に活動し，分かることの楽しさを実感できる「学び合い」活動を取り入れた T T 授業の研究を進めていくことにした。

2 研究教科・領域等

中学校数学科と英語科（1 学年）において研究課題の解決に向けて研究を行った。

3 研究の成果

生徒が主体的に活動し，分かることの楽しさを実感できる T T 授業を実現させるために，授業の導入において，学習課題との出会いやその内容を工夫した。また，「学び合い」活動を取り入れ，様々な学習状況の生徒が考えを出し合い，それを交流させ理解を深めさせる場を設定した。「学び合い」活動においては，T 1・T 2 がそれぞれの生徒の活動状況を正確に把握し，その状況に応じた適切な支援をすることにした。

(1) 生徒の「興味・関心」を高め，主体性をもたせる T T 授業について

生徒一人一人が「興味・関心」を高め，意欲をもって学習に取り組むことができるように T T 授

業の導入を工夫した。具体的には、次の①～③を行った。
 ①T1・T2で掛け合いをする（ビデオや写真を用いてのT1・T2の対話，T1・T2での活動のデモンストレーション）。②T1の説明に沿ってT2が実験道具やパソコン等の操作を行い，視覚的に示す。③T1が学習課題の説明を行う際にT2が生徒の理解状況を観察する。また，問題の内容については，多様な解決方法が含まれるもの，生徒の習熟度に対応するもの，身近にある題材を使用し，親近感を覚えるものを取り上げるなど，工夫を凝らした。その結果，生徒は問題や課題を正確に把握し，「興味・関心」を高め，意欲的に活動に取り組むことができた（図1）。

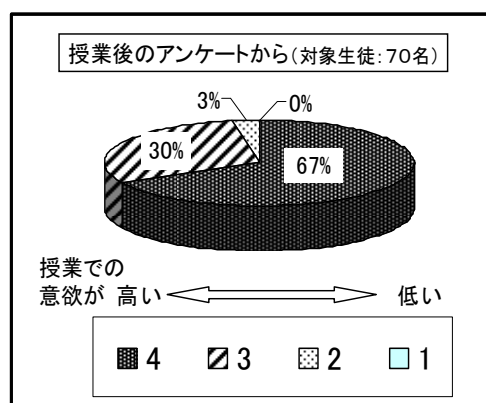


図1 T T授業での意欲の高まり

(2) 授業における生徒同士の「学び合い」活動について

「学び合い」活動においては，他とかかわる前に個人の考えをもたせる活動を取り入れた。それは，生徒は自分の考えをもたないと他者との交流の中で理解が深まらなないと考えたからである。また，活動における目標を明確にすることや，活動のルールを作成した上で，それを守ることを指示した。T Tによる支援では，「学び合い」活動に対して，T1とT2が別々の観点から生徒を観察したり，また，共通の観点から観察したりと，状況に応じた支援を行った。それぞれの観察は座席表や班カードなどを準備し，記録した。そして，「学び合い」活動における生徒の考えや意見を班や学級に紹介させ，グループで深まった考えを学級全体で共有化させることにした。これらの手立てにより，生徒同士の交流が深められ，学習内容の理解へとつながられた。また，アンケートやビデオを分析すると，すべての学習状況の生徒の間で「学び合い」が行われたことが分かった。学力が下位の生徒が上位の生徒に考えを伝える割合が28%を占め，「学び合い」活動は上位の生徒から下位の生徒への一方的に教えることとは違い，「互いが自分の考えを伝え，交流することで，学習内容についての新たな発見をしたり，理解を深めたりする活動である。」ことが分かった（図2）。

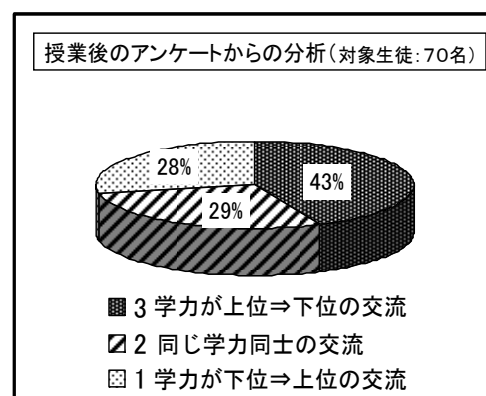


図2 「学び合い」の状況

4 今後の課題

- (1) 人との交流が苦手な生徒に対する手立てを工夫する。
- (2) 生徒同士の交流だけでは十分に理解ができない生徒への手立てを工夫する。
- (3) 授業における「学び合い」活動と学級経営との連携を深める。

《参考文献》

- ・ 佐賀県教育委員会 『佐賀の子ども観・教師観・学校観～平成18年度佐賀県小・中学校学習状況調査～』 2007年3月
- ・ 佐賀県教育委員会 「平成19年度基礎学力向上のためのT T非常勤講師配置校説明会資料～ティームティーチング授業に関する意識調査 集計結果～」 2007年4月